

別府市スマートライフシティ計画初会合

がん患者の遺伝子情報活用し継続支援

「先進的な取り組み 有用性実証しよう」

別府市スマートライフシティ計画の初会合に出席した関係者ら



がん患者の遺伝子情報を活用して、治療から日常生活まで継続的な支援をするシステムづくりを目指す「別府市スマートライフシティ計画」の関係者による初会合が11月、別府市の湯のまちけんこうパークであった。

市で実施できる。遺伝子検査の有用性を実証し、世界に発信できる成果を出していきたい」とあいさつした。

計画を推進する別府市医師会と九州大学病院別府病院、ヤフージャパン（東京）の関係者ら約30人が出席。3者の代表が「全国でも先進的な取り組みが別府

市で実施できる。遺伝子検査の有用性を実証し、世界に発信できる成果を出していきたい」とあいさつした。東京大学新領域創成科学研究科の鈴木横教授が「遺伝子検査機器は近い将来、安価でスマートフォンにも対応できるようになり、膨大な人のデータ（ビッグデータ）が集まる」と指摘。

「ビッグデータの解析情報を基に血液や尿からさまざまな疾患の検査が可能になる」と、遺伝子情報を活用する最先端の研究を紹介した。

ヤフージャパンの日野隆史氏が、医療現場でのイン

ターネットセキュリティについて①パソコンのシステムやソフトなどを最新版にしておく②守る情報の優先順位を決めておく③バックアップを小まめに取る―ことをアドバイスした。

スマートライフシティ計画は、九大病院別府病院と別府市内の民間病院が連携。患者のがん細胞の遺伝子の特徴を調べて、最適な治療法や薬剤を選択すると同時に、唾液から採取した遺伝子情報から健康上のリスク管理をして、退院後の日常生活も支援する。データは関係の医療機関がインターネットで共有する。今後、連携する病院を増やしていく。